

2023年、博物館のいま

遠藤秀紀

東京大学総合研究博物館

あの頃、博物館は何に飢えていたのだろうか？

自然史博物館の今日の立ち位置を理解するべく、現在に直結した近接過去として1990年代に立ち返り、学者が渴望していた博物館の姿を探りながら、現実のいまと比較してみたい。

話は、国の中央の過去に遡る。当時、自然史博物館とそこで進められる研究が、学術の姿として一人前に扱われていないという憤慨に満ちていた。一国のナチュラルヒストリーをリードする実態とシンボルを兼ねた国立科学博物館は、年間予算三十億円を超えるトップダウン組織となっていたが、その館長は文部事務次官経験者をはじめとした官僚が務め、学者は明確にそれより下位に位置づけられた。予算や施策そして自らの未来を、学者が自分たちの手で決められないという特異な事態が常態化していたといえる。一方、自治体の博物館の多くは、大学の人間から見たら信じられないことに、科研費の機関番号すら獲得できないまま、貧困に喘いでいた。貧困は物的要素にとどまらず、精神世界にも及んでいた。博物館で論文を書こうとする人間が行政職務に配転されることは低質な自治体では日常的であり、研究する立場が守られる場面は少なかった。そして、生涯教育・社会教育においては、知の自由な表現の場というよりは、行政からの指示と承認を待つ硬直化した意思決定を余儀なくされた。

自然史博物館を窮状から救おうと、博物館内部に限らず多くの学者が声を上げた。しかし、彼らがたとえば学術会議の内外から国や社会に何を訴えようと、その多くは施策として手当されることはなかった。

「博物館を大学並みにしたい」

その言葉を学術会議で何度となく聞いた。人文科学には、頂点に国立民族学博物館と国立歴史民俗博物館があり、博物館を研究機関として育てようという国の意思を垣間見ることができたが、ひとたび自然史となると、突然縦割り行政における学術の反対側に置かれ、アカデミズムの外に追いやられてしまう。自然史博物館は「学」の手に無く、国による学術研究の場としての発展策は長らく沈滞したといえる。

今日の博物館の姿は、一世代三十年という近接した過去の上に成り立っている。およそ三十年前、自然史博物館を高度化しようとした学術会議はじめ学者・研究者の熱意は、何を得て、また何を得られないまま経過したのだろうか。自然史博物館のこれからを考える基礎として、論じておきたい。